



新編会津風土記に書上げた百姓の善行推せん文書

難くない。

4、村の発達 寛文五年（一六六五）の書上げには、家数が二六、かまどが三三、人口一三六とある。貞享二年（一六八五）の書上げには鎮守大神宮は田村山へ引宮したとある。古い宮跡が伊勢の宮の小字名に残っている。明治になって再び田村山より戻し、村東に天照皇大神宮として祭っている。その入口の小祠には、しんめいさまが二対収めてある。文化六年になると家数一〇軒と激減している。その原因はよくわからない。寛文五年の書上げには、関下河原、やくぶん河原、塚の腰河原、ごんげん河原、だいの河原など、村の周囲にいくつもの広い河原が横たわり、村の西南には畠の中に狐穴があつて、年々子狐を産んでいたと記録してあるほどであるから周囲には雑木林、葦谷地などもたくさん残り、清水も広く湧出していたようである。しかもその頃既に田一六町余、畑五町余が開かれ、二六戸の家並みがあつたことから、既に農業開拓では過飽和の人口が住んでいたかにも見える。次々と廃屋ができ、その潰れ屋敷と思われるものも、今に残っている。

大正十年より始め、十二年に耕地整理の完成した時の耕地面積は水田一五町、畑一町とあつて、水田は三〇〇年間増加どころか、いくらか減じてさえいる。専ら開拓は河原地などを畑に開墾することがなされてきた。